



## 追悼

一番ヶ瀬康子先生のご逝去を悼みて

名誉会員 田端 光美

日本女子大学名誉教授・本会名誉会員、一番ヶ瀬康子先生は、2012年9月5日、直前までいつもと変わらないご様子でいらしたそうですが、脳梗塞の再発のため85年のご生涯を閉じられました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

先生は第二次大戦のさ中に台北から日本女子大学家政学部第3類（社会事業専攻）にご入学、敗戦による繰り上げ卒業後は上田の鐘紡丸子工場など、働く人々の生活相談や付属丸子高等文化学院主事として年少労働者問題を深く心に刻まれ、1954年、当時の日本女子大学社会福祉学科主任菅支那教授に招かれ助手として母校に戻られました。以来、50年余年を教員、学校法人理事として研究、教育、学校経営にご尽力されました。助手に就任されて間もなくから、助手や学生によびかけて研究会を立ち上げ、学科の研究誌刊行を提案されるなど、学生にとっては輝かしいばかりのご活動でした。

先生は1954年本学会の創設準備にあたり、関係大学の先輩諸先生に協力され同年秋の第二回大会を日本女子大学で開催、創立記念発表会ではジョン・ロックの貧困児童観について発表されました。その後、第12～13期、15期～16期は会長、18～19期は理事として、実践の理論化を含め社会福祉を学として体系化することを課題にし、あわせて市民の社会福祉に対する認識を啓発することの必要を強く感じられ、積極的に市民教育にも力を尽くされました。それらの実績は日本学術会議第13期～第15期会員に推挙され、学門の殿堂とされる学術会議の議論に21世紀高齢社会を見据えた介護問題について問題提起されるなど、先生はつねに先見の目をもって議論をリードし、若い人を育てることにも情熱を傾けられました。

その間に多くの論文、著書を発表され、先生の1日はナポレオン並みと聞かれたことがありましたが、ある日、目白の研究室で故人となられた佐藤進先生が「話した言葉がそのまま文になる一番ヶ瀬先生には、真似したくても出来ない」と語られたかたように、先生はボイスレコーダーに吹き込むと、そのまま文章になるのです。緻密に思考されて頭のなかにメモを作っているかのようでした。でも苦手は機械等の操作、一生懸命やって失敗すると、ああやっぱりダメ、といわれるあの笑顔、もうお会いできないのは限りなく寂しい思いですが、「自分のできる限りのことは、精一杯やり尽くしたとでもいつているかのようでした」とのご遺族のお話に、感謝をこめてゆっくりお眠りくださいと申し上げます。